

# 乳児期における父親の育児役割とストレス

桑名行雄、桑名佳代子、坂上明子、坂原純子、大沼珠美

宮城大学看護学部

## キーワード

父親、父親役割、性役割、育児ストレス

father, paternal role, gender role, parenting stress

## 要 旨

本研究の目的は、乳児期における父親の役割認知および性役割に関する態度と育児ストレスとの関連を明らかにすることである。3～5ヶ月児の父親336名を対象に質問紙調査を行い、有効回答198（58.9%）について分析し、以下の結果を得た。1）父親役割については、愛情を持って家族を経済的に支え、父としての自覚と責任感および決断力を持つことが多く認知されていたが、父親役割認知と父親としての自己が一致する父親は半数に満たなかった。2）父親役割認知が自己と一致している父親は、家庭で役割を分担することに肯定的であり、育児ストレスが低かった。3）妻が期待通りに母親役割を担っていると認識している父親のストレスは低かった。4）父親の多くは家庭で役割分担をすることに理解を示しているものの、3歳児までの育児は母親の役割と考えていた。5）父親役割として包容力を選択した父親は、育児や家事を女性の役割として限定しない態度を示した。6）第1子、また高学歴の父親の育児ストレスは低い傾向があることが認められた。

## Paternal Role and Stress in Parenting during Infancy

Yukio Kuwana, Kayoko Kuwana, Akiko Sakajo, Junko Sakahara, Tamami Onuma

Miyagi University School of Nursing

## Abstract

The purpose of this study was to examine the awareness of fathers of their paternal role during the infancy of their child and the relationship between parental behavior and the stress. Questionnaires were distributed to 336 fathers who had infants between the age of 3-5 months. One hundred and ninety-eight subjects (58.9%) responded.

After analysis, the following results were obtained. 1) Many fathers recognized their role in financially and emotionally supporting the family and the importance of paternal awareness, responsibility, and decision-making; however, paternal awareness did not accord with self-practice in more than half of the respondents. 2) In the respondents whose paternal role accorded with their self-practice, the fathers assumed a share of parenting responsibilities at home and their parenting-related stress level was low. 3) When fathers were aware of the need to share parenting responsibilities with their wives and the views of their wives on this subject, their stress level was low. 4) Although many of the fathers understood the parenting role of fathers at home, they often thought that their wives should be responsible for the parenting of infants under the age of 3. 5) Fathers who were openminded towards their paternal role did not think that child-rearing or housekeeping were feminine gender roles. 6) Parenting-related stress levels in fathers tended to be low when the father was having his first child or had a high level of education.

## I はじめに

「育児をしない男を、父とは呼ばない」。厚生省の少子化対策キャンペーン(1999)とはいえ、刺激的とも思えるその言葉は記憶に新しく、多くの父親が耳を傾けたに違いない。この、男性の育児参加キャンペーンに次いで、厚生省は「全国家庭動向調査」(2000)<sup>1)</sup>を公表し、育児のほとんどを妻が担い、育児に関して夫の参加が少ない実態を浮き彫りにした。一方では、育児に対する父親の役割や責任の重要性が明らかになりつつあり、これまでの研究報告<sup>2)~7)</sup>では、父親の育児や家事への参加は母親の育児不安を減少させ、子供の発達促進や父親自身の人格的発達をも促進させることが示唆されてきた。また、新聞報道などでも育児に積極的な態度をとる父親の情報が増え、少数ではあるが育児が意義あるもので、しかも楽しめている父親がでてきている。

しかし、多くの父親は社会や妻からの育児参加への期待や要求を受け、伝統的な父親イメージに影響されながらも現実に対応すべく、ギャップを感じながら育児にかかわりストレスを感じていると思われる。Abidin(1992)<sup>8)</sup>は、親としてのふるまいや子どもへの適応は、親役割に関連する親のパーソナリティーの構成要素を通して、社会的、環境的、行動的、発達的な変数に影響されると唱えており、親としての認識や信念が重要な役割を担っているとしている。これまで、父親としての認識と育児ストレスに関する研究は少なく、わが国では、岩田ら<sup>9)</sup>の報告にみられる程度である。

父親は児の誕生に際して高揚や抑うつなどの情緒的反応を示し、平常状態に戻るのが3~4ヶ月とみられる<sup>10)</sup>ことを考慮し、本研究では生後4ヶ月前後の乳児期に焦点を当て、父親の育児役割に影響すると考えられる父親役割認知と性役割に関する態度に注目し、育児ストレスとの関連を明らかにしたい。

## II 研究方法

### 1. 対象

宮城県内の保健福祉センター2施設において、2000年2月から4月に開催された3、4か月児育

児教室に参加した母親の夫336名である。

### 2. 調査方法・期間

3、4か月児育児教室に参加した母親に調査趣旨および方法を説明し、調査協力の同意が得られた336名に父親用の質問紙を配布した。質問紙は自宅が無記名による記入とし、約1週間で郵送による回収を行った。質問紙の配布期間は、2000年2月~4月であった。

### 3. 調査内容

調査項目は、①背景(年齢、職業、最終学歴、家族形態、児の月齢、児の性別、児の出生順位)、②夫がイメージする母親役割(以下、母親役割認知とする)及び妻との一致度、③夫自身がイメージする父親役割(以下、父親役割認知とする)及び自己との一致度、④父親の性役割に関する態度、⑤父親の育児ストレス、⑥育児における困った事・つらかったことについての自由記載欄とした。②、③、④、⑤の測定用具を以下に示す。

#### 1) 母親役割認知・父親役割認知との一致度

仁平ら<sup>11)</sup>の「母親が備えていなければならない条件」の調査結果を参考に、「愛する親」、「ステレオタイプの親」、「健康な親」、「養育的親」、「開かれた親」の5カテゴリーを満たすような45語に、「その他」を含めて46の選択肢を作成した。この中から、「母親が備えていなければならない大切な条件」、「父親が備えていなければならない大切な条件」を5項目ずつ選択することにした。また、役割認知との一致度は、「一致する」、「だいたい一致する」、「どちらともいえない」、「あまり一致しない」、「一致しない」の5段階評定とした。

#### 2) 性役割に関する態度

若松ら<sup>12)</sup>が「性役割3因子」とした「女性の職業進出」、「脱性役割分業」、「男性の家庭役割分担」の下位12項目に対して、「そのとおりである」~「違う」までの4段階評定を用いた。「脱性役割分業」については得点を逆転させ、性役割分業に反対、男性の家庭役割分担に賛成、及び女性の職業進出に肯定的であることが高得点となる。

#### 3) 父親の育児ストレス

岩田ら<sup>13)</sup>の「ストレス測定尺度」を使用した。この尺度は、育児にかかわるストレスを測定す

るもので、「夫婦関係」、「父親であることの喜び」、「何らかの制限を受けている」、「役割負担」、「子供の特徴／父親能力」の5項目（下位項目27）に対して、「全く違う」～「全くそのとおり」までの5段階評定である。7つの下位項目については肯定文のため逆配点し、得点の可能範囲は27～135点で、得点が高いほどストレスが高いことを意味する。

4. 分析方法

調査項目の集計、解析にはSPSS. 10. 0Jを用いた。一元配置分散分析により群間に有意差が見られた場合には、Bonferroni法による多重比較検定を行った。

III 結果

質問紙は211部が回収され（回収率62. 8%）、記入不備を除いた198名（有効回答率58. 9%）を分析対象とした。

1. 対象者の背景

平均年齢(SD)は32. 0 (±5. 3) 歳であり、対象者の背景として多数を占めるのは、会社員が143名(72. 2%)、4ヶ月児をもつ親が167名(84. 3%)であり、第1子の父親は105名(53. 0%)、核家族が165名(83. 3%)であった(表1)。核家族で第1子の父親は90名(45. 5%)であった。

2. 親役割認知

母親役割認知についての5項目選択では、「愛情」をあげたものが146名(73. 7%)と最も多く、次いで「健康」、「子どもの気持ちの理解」、「やさしい」、「明るい」の順に続いた(図1)。これらの父親がもつ母親役割認知と、実際に妻がどの程度一致しているかの設問には、「一致する」(18. 7%)、「大体一致する」(63. 1%)と約8割が一致していると答えていた(図2)。

父親役割認知についての5項目選択では、母親役割認知と同様に「愛情」が1位に選択され(103名、52. 0%)、次いで「経済力がある」、「家庭を守る」、「健康」、「父としての自覚」、「責任感」と続いた(図3)。この役割認知と父親としての自己との一致については、「一致する」(5. 6%)、「大体一致する」(40. 9%)であり、一致する父親は半数に満たなかった(図4)。

表1 対象者の背景 n=198

父親の年齢	32. 0±5. 3歳	(19-47歳)
	29歳以下	73名 (36. 9%)
	30～34歳	62 (31. 3%)
	35歳以上	63 (31. 8%)
職業	会社員	143名 (72. 2%)
	公務員	33 (16. 7%)
	自営業	10 ( 5. 1%)
	その他	10 ( 5. 1%)
	無職	2 ( 1. 0%)
最終学歴	中学校	5名 ( 2. 5%)
	高等学校	62 (31. 3%)
	専門学校	30 (15. 2%)
	短期大学	8 ( 4. 0%)
	大学・大学院	89 (44. 9%)
	不明	4 ( 2. 0%)
子どもの月齢	3ヶ月	24名 (12. 1%)
	4ヶ月	167 (84. 3%)
	5ヶ月	7 ( 3. 5%)
子どもの性別	男	113名 (57. 1%)
	女	85 (42. 9%)
子どもの出生順位	第1子	105名 (53. 0%)
	第2子	69 (34. 8%)
	第3子以降	23 (11. 6%)
	不明	1 ( 0. 5%)
家族形態	核家族	165名 (83. 3%)
	拡大家族	32 (16. 2%)
	不明	1 ( 0. 5%)

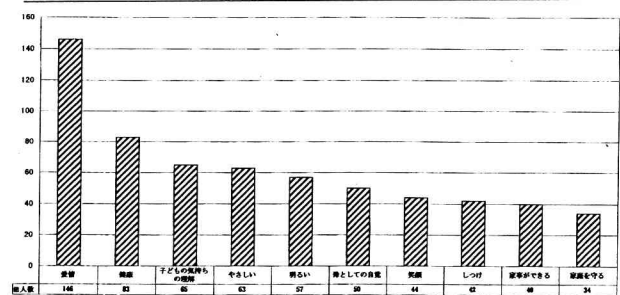


図1 母親役割認知

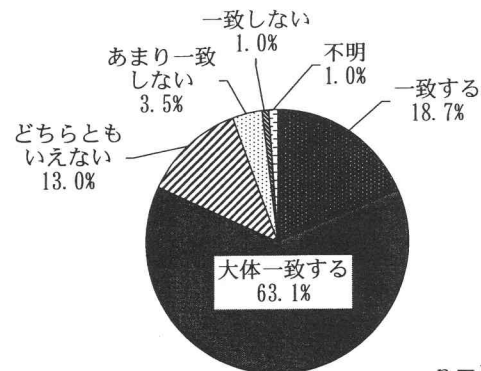
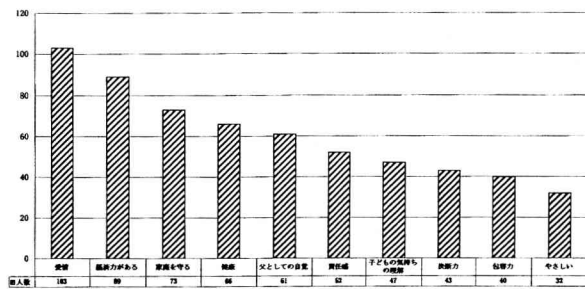


図2 母親役割認知と妻との一致度



(n=198: 産後回答)

図3 父親役割認知

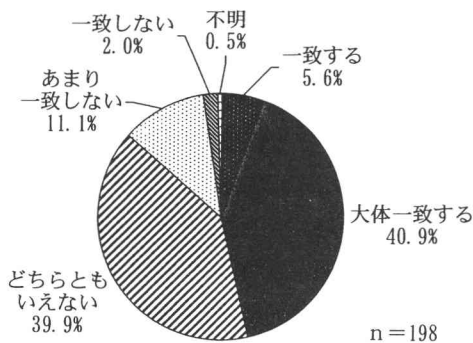


図4 父親役割認知と自己との一致度

### 3. 性役割に関する態度

#### 1) 性役割得点

性役割3因子である「脱性役割分業」、「男性の家庭役割分担」、「女性の職業進出」の12項目による父親の性役割に関する態度の平均合計得点(SD)は、33.7 (4.56)であった。各因子の平均値は、脱性役割分業が2.51、男性の家庭役割分担が3.18、女性の職業進出が2.75であった。若松ら (1991)<sup>10)</sup>の結果との比較を表2に示す。

表2 各因子の性役割得点

性役割因子	本調査(2000) (n=197) MEAN(SD)	若松ら(1991) (n=326) MEAN(SD)
脱性役割分業	2.51 (.88)	2.21 (.64)
男性の家庭役割分担	3.18 (.87)	2.53 (.56)
女性の職業進出	2.75 (.85)	2.78 (.57)

性役割に関する態度を項目ごとに肯定・否定に分けてみると、「妻が仕事を持っている場合には、夫も家事を分担すべきである」を肯定するものは91.3%である一方で、「子どもが3歳くらいになるまでは母親は育児に専心すべきである」

との意識をもつ父親は81.8%と多くを占めていた(表3)。

#### 2) 親役割認知と性役割に関する態度との関係

性役割の合計得点では、母親役割認知として「家庭を守る」を選択した群(32.18)と選択しなかった群(34.07)の間に有意差( $t=2.22, p<.05$ )が認められた。また、脱役割分業の得点では、「家庭を守る」を選択した群(8.97)と選択しなかった群(10.25)の間に有意差( $t=2.77, p<.01$ )が認められた。父親役割認知と性役割得点との関連では、「包容力」を選択した群(10.73)は選択しなかった群(9.85)より有意に脱役割分業得点が高値であった( $t=1.99, p<.05$ )。

また、父親役割認知と自己との一致度による性役割合計得点の平均値の差をみた一元配置分散分析では、合計得点と男性の家庭役割分担で有意差が認められた( $F(2, 193)=4.15, p<.05$ 、および $F(2, 193)=3.40, p<.05$ ) (表4)。多重比較では、父親役割認知が自己と一致する群は、どちらともいえない群に比較して家庭役割分担得点が高い有意に高値であり( $p<.05$ )、役割認知が一致している父親は、家庭で役割を分担することに肯定的といえる。

#### 4. 父親の育児ストレス

##### 1) ストレス得点と対象者の背景

ストレス測定尺度による合計得点の平均(SD)は、63.7 (13.2)であった。1項目あたりの平均でみると、「子供の特徴/父親能力」(2.6)が最も高く、次いで「何らかの制限を受けている」(2.5)、「夫婦関係」(2.4)、「役割負担」(2.2)、「父親であることの喜び」(2.0)であった。

対象者の背景との関連で、ストレス合計得点の平均値にt検定で有意差が認められたのは、児の出生順位と父親の最終学歴であった(表5)。第1子群は第2子以降群よりストレス得点が低値であり( $t=2.196, p<.05$ )、また最終学歴を2分してみた場合、高学歴群(短期大学・大学・大学院)は低学歴群(専門学校・高等学校・中学校)よりストレス得点が低いことが示された( $t=2.503, p<.05$ )。

表3 父親の性役割に関する態度

n=197

性役割因子	項 目	その思う人数(%)	そう思わない人数(%)
脱性役割分業	子どもが3歳くらいになるまでは母親は育児に専心すべきである	161 (81.8)	36 (18.3)
	家族を守り、子供を育てることが女性が社会に対してなすうる最大の貢献である	88 (44.7)	109 (55.3)
	結婚した女性は特別な仕事でもない限りは、育児や家事に専心して家族に尽くす方が仕事をするよりも意義がある	77 (39.0)	120 (60.9)
	妻が仕事を持っていようといまいと、家事や育児は女性の果たすべき役割である	67 (34.0)	130 (66.0)
男性の家庭役割分担	家事や育児を分担しない男性は、人生の大切なものを失うことになる	125 (63.4)	72 (36.6)
	育児期間中は男性にも労働条件などの配慮がなされるべきである	149 (75.6)	48 (24.4)
	妻が仕事を持っている場合には、夫も家事を分担すべきである	180 (91.3)	17 (8.7)
	日本の男性は余りにも仕事や社会に拘束され過ぎている	171 (86.8)	26 (13.2)
女性の職業進出	一般に男女の性差による能力差よりも個人の能力や資質の差の方が大きい	159 (80.7)	38 (19.3)
	職業を持っている女性もそうでない母親と同様に、愛情豊かでしっかりとした親子関係を築くことができる	153 (77.7)	44 (22.3)
	女性が仕事をするためには、たとえ夫が転勤しても仕事をやめないくらいの覚悟が必要である	65 (33.0)	132 (67.0)
	結婚に関わりなく、女性も仕事を持って経済的に自立すべきである	102 (51.8)	95 (48.3)

表4 父親役割認知と自己との一致度による性役割得点

平均値(SD)

性役割因子	一致度	一致する (n=92)	どちらともいえない (n=78)	一致しない (n=26)
性役割合計得点 *		34.12(4.67)	32.8(4.63)	35.23(3.51)
脱性役割分業		9.87(2.58)	* 9.94(2.35)	11.00(2.47)
男性の家庭役割分担 *		13.10(2.20)	12.17(2.37)	13.12(1.80)
女性の職業進出		11.15(1.73)	10.71(1.96)	11.15(1.80)

\* p < .05

表5 児の出生順位と父親の最終学歴による育児ストレス

平均値(SD)

ストレス項目	児の出生順位		父親の最終学歴	
	第1子 (n=105)	第2子以降 (n=93)	低学歴群 (n=97)	高学歴群 (n=97)
ストレス合計得点	61.82(13.60)	* 65.90(12.42)	66.10(13.72)	* 61.39(12.46)
夫婦関係	11.44(3.90)	* 12.39(3.72)	12.49(4.02)	* 11.26(3.61)
父親であることの喜び	9.04(2.70)	* 10.65(2.81)	10.03(2.92)	* 9.49(2.77)
何らかの制限を受けている	12.03(3.78)	12.94(3.60)	13.07(3.74)	11.91(3.64)
役割負担	11.05(4.19)	11.20(3.56)	11.62(4.05)	10.67(3.76)
子供の特徴/父親能力	18.35(4.03)	18.73(3.30)	18.97(3.83)	18.07(3.57)

\* p < .05 \*\* p < .01

ストレス項目でみると、第1子群は第2子以降群に比較して「父親であることの喜び」におけるストレス得点が低く ( $t=4.106, p<.01$ )、高学歴群では低学歴群より「夫婦関係」、「何らかの制限を受けている」における得点が低かった ( $t=2.256, p<.05, t=2.2, p<.05$ )。また、一元配置分散分析および多重比較により、30~34歳群より35歳以上群では「父親であることの喜び」におけるストレス得点が高く ( $p<.05$ )、児の月齢が3ヶ月児群は4ヶ月児群より「夫婦関係」における得点が高値であった ( $p<.05$ )。

2) 親役割認知とストレス得点との関連

母親役割認知と妻との一致度および父親役割

認知と自己との一致度を3分類し、一元配置分散分析および多重比較によってストレス得点平均値を比較した。

母親役割認知との関係では、一致する群は、どちらともいえない群よりストレス合計得点と「夫婦関係」、「父親であることの喜び」項目で得点が低かった(表6)。また、父親役割認知では、一致する群のストレス得点が低いことが示された。ストレス項目で見た場合、「夫婦関係」、「父親であることの喜び」、「子供の特徴/父親能力」で父親役割認知と自己との一致度の間に有意差が認められ、一致する群はいずれも得点が低値であった(表7)。

表6 母親役割認知と妻との一致度による育児ストレス

平均値(SD)

性役割因子	一致度	一致する (n=162)	どちらともいえない (n=25)	一致しない (n=9)
ストレス合計得点		62.01(12.40) *	* 73.32(12.97)	66.22(14.37)
夫婦関係		11.35(3.51) *	* 14.96(4.14)	12.89(4.46)
父親であることの喜び		9.55(2.84)	* 11.16(2.76)	9.89(2.42)
何らかの制限を受けている		12.15(3.60)	13.92(3.96)	13.78(4.24)
役割負担		10.74(3.61)	13.60(4.79)	10.67(3.24)
子供の特徴/父親能力		18.27(3.66)	19.68(3.99)	19.00(2.92)

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$

表7 父親役割認知と自己との一致度による育児ストレス

平均値(SD)

性役割因子	一致度	一致する (n=92)	どちらともいえない (n=79)	一致しない (n=26)
ストレス合計得点	**	60.03(12.51)	* 66.18(13.09)	68.31(11.85)
夫婦関係	**	10.85(3.72)	* 12.54(3.59)	13.31(4.09)
父親であることの喜び	**	8.76(2.37)	* 10.51(3.05)	11.08(2.54)
何らかの制限を受けている		11.84(3.83)	12.73(3.65)	13.65(3.17)
役割負担		10.93(3.70)	11.28(4.09)	11.00(3.91)
子供の特徴/父親能力	**	17.66(3.87)	* 19.11(3.41)	19.58(3.23)

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$

### 3) 性役割に関する態度とストレス得点の関連

父親の性役割に関する態度12項目について、そのとおりである～違うに回答した4群間のストレス得点の平均値を比較した結果、2項目でグループ間に有意差が認められた。「家事や育児を分担しない男性は、人生の大切なものを失うことになる」の項目では(F(3, 193)=4.128,  $p < .01$ )、多重比較により、「そのとおりである」と回答した群(60.25)は「どちらかというところである」群(66.75)よりストレス得点が低かった( $p < .05$ )。また、「結婚に関わりなく、女性も仕事を持って経済的に自立すべきである」項目では(F(3, 193)=4.152,  $p < .01$ )、「違う」と回答した群(55.32)と「そのとおりである」(67.54)群の間( $p < .01$ )に、また「違う」と回答した群と「どちらかというところである」群(65.25)の間( $p < .05$ )に有意差が認められた。

さらに、項目に対する回答を肯定・否定の2群に分類し、ストレス得点の平均値を比較した結果、「女性が仕事をするためには、たとえ夫が転勤しても仕事をやめないくらいの覚悟が必要である」項目で、肯定群(67.02)は否定群(62.17)よりストレス得点が高いことが示された( $t = 2.453$ ,  $p < .05$ )。また、「日本の男性はあまりにも仕事や社会に拘束されすぎている」項目においても、肯定群(64.68)は否定群(57.73)より得点が高い結果であった( $t = 2.535$ ,  $p < .05$ )。

### 5. 自由記載(育児における困ったこと・つらかったこと)

育児における困ったこと・つらかったことを自由に記載する欄には、101名が記載しており、内容は10項目に分類できた。一番多かった内容は児の「泣き」に関することで、「妻がいないときに泣かれて、おむつ、ミルク、抱っこなど散々やつたつもりでも、泣きやまないときは困り果てる」といった泣きへの対応や、夜泣きについて36名が困った・つらかったこととして記載していた。2位には、かぜ、発熱、湿疹など病気や症状に関する知識や対応などがあげられ、14名が記載していた。次いで、一人で面倒みるときの不安が6名、妻の

イライラや不安定さが6名、夫婦でかぜなど身体的な不調になったときの児の世話をどうするかが5名、睡眠不足が5名、他の子への愛情の度合いが減るが4名、授乳に関すること3名、入浴に関すること2名、その他としては、家で仕事ができない、プライベートな時間が減った、妻が食事を作らなくなったなどが記載されていた。

## IV 考 察

### 1. 親役割認知

母親役割として選択された項目は、「愛情」、「健康」、「子供の気持ちを理解する」、「やさしい」、「明るい」、「母としての自覚」、「笑顔」、「しつけ」の順に続き、児との直接的なかわりに必要とされる項目が選択されており、母親が愛情を持って健康で優しく保護的に育児にかかわることを期待しているといえる。一方、父親役割として選択された項目は、愛情、経済力がある、家庭を守る、健康、父としての自覚、責任感、子供の気持ちの理解、決断力と続き、全体的にみた場合には、子どもに対して直接的な役割を担うというより、愛情と家族を支える経済力をもち、責任感や決断力のある家父長的なことを父親役割として捉えているといえる。しかし、2位の「経済力がある」は44.9%と半数に満たない割合であり、個々人でみた場合には、選択順位に見られるほど父親役割に必要なこととしては捉えていないといえる。従来のような家父長的な父親役割が変化しつつあると推測できる。女性も働き収入を得ながら育児をし、それに伴い父親も育児や家事を分担する傾向が増えてきている背景があると思われる。

夫からみて妻の母親としての役割がほぼ一致しているのに比べ、夫自身は父親としての役割があまり一致していないという結果が示された。本研究では、一致するあるいは一致しない役割認知項目を調査していないため考察は困難であるが、女性の職業進出、男性の家事や育児にかかる役割の増加、それらに伴う家父長的な存在からの転換、不況などによる経済的な要因などがその背景にあると考えられる。行政が出生率低下に対する対策のひとつとして、男性の育児参加を奨励し始めた

ことも一要因といえるかもしれない。さらに、子供たちが引き起こすいじめ、犯罪、家庭内暴力、自殺などが報道される度に、家庭内の父親不在などが問題とされること<sup>15)</sup>により、父親の役割を再考させられ、あるべき父親像と現状に影響を及ぼしていると考えられる。

いずれにせよ、父親の半数ほどは、父親役割に適応の感覚が得られない、あるいは理想とする父親像と実際にズレや葛藤を感じている状況にあると推測でき、一致しない事柄を明らかにすることが今後の研究課題のひとつといえる。

## 2. 父親の性役割に関する態度

性役割に関する態度を測定する尺度を開発した若松ら(1991)の調査では、9割以上が大学・大学院卒業という高学歴者で、いわゆる企業戦士といわれる既婚男性を対象としている。この中で、子どもをもつ男性(n=90)については、脱性役割分業(2.12)、男性の家庭役割分担(2.61)、女性の職業進出(2.68)と報告されている<sup>16)</sup>。また、子どもを持つことによって、育児に関与するように態度が変わっていくのではなく、より分業化の方向に変わり、家庭役割分担は殆ど変わらないことが指摘されている。今回の調査では、性役割3因子すべてが若松らの結果より高値であり、現状打破的な性役割観が強まっているといえた。これは、対象者の属性の違いと近年の性役割観の変化が影響していると考えられるが、家庭役割分担が3.18と大きく賛成に傾いたことは特に注目され、家事育児なども分担して携わることにより理解を示してきているといえる。

しかし、3因子の中では、「脱性役割分業」の得点が2.51と肯定的とも否定的ともつかない態度であった。これは、母親役割認知として「家庭を守る」を選択した父親が、性役割得点と脱性役割得点が有意に低く、育児や家事を女性である妻に求めている父親が依然として多いことが「脱性役割分業」の得点から窺える。父親役割認知で「家庭を守る」が上位に選択されていたが、経済的、リーダーシップ的なことと考えられ、同じ表現であっても母親が「家庭を守る」ことと意味合いが違ふと思われる。「子供が3歳くらいになるまでは母

親は育児に専心すべきである」の項目に対して、8割の父親が肯定的であり、「三歳児神話」とも呼ばれる伝統的な育児に関する考え方が依然として根強いことがわかる。

しかし一方では、「包容力」を父親役割として選択している父親では、脱性役割分業の得点が有意に高いことが注目される。河合<sup>17)</sup>によれば、母性の原理とは「包含する機能」と位置づけており、「包容力」を選択した父親は、母性を兼ね備えていると考えることもできる。父親が日々育児に関わり、状況に応じて「包み込む」母性的役割をも分担するといった、これまでと異なる父親が現れてきていると推測できる。家庭役割分担得点で示されたように、父親役割認知が自己と一致している父親は、どちらともいえない父親より有意に得点が高く、家庭で役割を分担することに肯定的である。このように、自分が抱く父親役割と自己とが適合し、包容力を備える父親こそ、やさしさや保護的役割をもつ新しい父親役割を創っていくものと思われる。

斎藤<sup>18)</sup>によれば、「自ら収入を得るようになった女性の多くは、家事と育児を介して一定の男に奉仕する生活(結婚)に魅力を感じなくなるはずである。この時点で望まれる父親とは、愛する女性の生んだ子(実子に限らない)の養育に他の男よりも関心を持ち、その成長に熱心に携わるものということになる」と、未来の父親像を述べているが、単に育児や家事を量的に分担することだけではなく、今まで以上に妻や子に関心を持ち、日々の生活を共にしながら家庭の中でのそれぞれの葛藤や問題を調整し、母親としての妻や子を支える役割を担う父親が出現しつつあると考えられる。

## 3. 父親の育児ストレスと関連要因

### 1) 育児ストレスと対象者の背景

ストレス合計得点の平均は63.7(SD13.2、範囲32-101)であったが、岩田ら<sup>19)</sup>の報告の平均値(63.6)とほぼ同じ結果であった。このストレス尺度は標準化されていないため、ストレスの程度に言及できないが、ストレス総得点135からすると、平均的にはストレスが高いとはいえないと考えられる。また、項目別に見た場合に、



「子供の特徴／父親能力」の平均得点(2.6)がやや高い結果については、父親が育児において最も困ったことの詳細欄に、乳児の泣いている理由がわからず、その対応に苦慮していることをあげた父親が多かったことが反映されているといえる。父親役割同一視(father role identity)の達成の過程について、生後4ヶ月は子どもの特質に自分たちの創造した方法で対応しはじめる段階である(Ferketich, Mercer, 1995)といわれ<sup>20)</sup>、調査対象の84.3%が4ヶ月児の父親であることから、子どもの出すサインを受け止めてよりよく対処できる能力がストレスにも影響していると考えられる。自由記載の内容には、何とか対応しようとするが、うまく事が運ばない父親のもどかしさが窺えた。父親が乳児の特徴や対応の技術などに関心を持ち、知識や技術を習得できる機会や場を多く設定する必要性があると思われる。

対象者の背景との関連では、児の出生順位と父親の学歴においてストレス合計得点に有意差が認められた。第1子の父親では第2子以降より低いストレス得点であった。第1子の父親では、新生児に対して興味を抱き、心を奪われ没頭する「没入感情(engrossment)」<sup>21)</sup>を引き続き抱いている結果と推測できる。「父親であることの喜び」項目では、第1子群と、子どもの人数が一人の父親のストレス得点が低いことから、父親にとって第1子の誕生は、児との絆に喜びや楽しみを持ち、育児に関わる態度が積極的であると考えられる。一方、第2子以降では、母親にとって夫が人的資源として最も有効な人であり、他の子供たちの面倒をみる助けとして融通のきく人と期待している<sup>22)</sup>ように、子どもが増えるに従って他の子どもに対する関わりが生じたり、仕事や社会的な役割増加などの負担が増えている結果と推測できる。35歳以上の父親において、「父親であることの喜び」項目のストレス得点が高かったのは、子どもの人数が影響していると思われる。

学歴別では、高学歴群のストレス得点が低い結果であった。項目別では、「夫婦関係」と「何

らかの制限を受けている」でも学歴による有意差が認められており、これらが合計得点における有意差に反映されていると考えられる。本研究における対象者の学歴による違いとストレス得点との関係を考察するには、情報が少なく多少の無理があると考えられるが、「夫婦関係」と「何らかの制限を受けている」についての下位項目から推測すると、妻から夫への要求が少なく、夫の育児への関わりが少ない場合にストレス得点が抑えられており、高学歴の父親は仕事に専念し家庭内での役割分担が少ないが、母親がこれを受け入れ、育児への協力をあまり父親に求めないことが反映されていると思われる。

また、3ヶ月児の父親は、4ヶ月児の父親より「夫婦関係」項目でストレス得点が高く示された。この項目内容は、「イライラした妻につきあう大変さ」、「もめ事の機会が増えた」、「いろいろ妻から要求される」、「妻からの期待が負担」、「妻からの期待がわからずイライラする」であることから、児が小さい時期ほど授乳や夜泣きの対応などで母親の負担が大きく、父親である夫に状況に応じた家事や育児を期待し、要求をしていることがわかる。夫が妻の要求や期待をどのようにうけとめているか、夫婦間の育児に対する認識のズレがストレスに影響を及ぼすことが示唆された。

## 2) 育児ストレスと親役割認知との関係

父親が考える母親役割と妻との一致度によってストレス得点を比較した結果は、一致する父親ではストレスが低いことが示された。「どちらともいえない」群の得点は、ストレス得点の平均値より10点程高い値であり、妻への母親としての役割期待が十分満足されない場合にはストレスが大きいといえる。

また、父親役割認知と自己との一致度では、一致している父親ほどストレスが低いという結果であり、イメージする父親役割と自己とが一致している父親は、父親役割を受容しストレスなく育児に関わっていると考えられる。また、ストレス項目別にみた場合に、「夫婦関係」、「父親であることの喜び」項目で、父親役割が一致

しているとストレスが低いことが示された。父親役割に適応の感覚をもっている父親は、妻との関係もよく、育児を楽しんでいるといえる。生後4ヶ月において、経験ある(第2子以降の)父親の役割適性(role competence)に影響する因子としてパートナー関係が明らかにされており、positiveな関係が父親役割にpositiveにフィードバックするといわれる<sup>23)</sup>。これらより、互いの役割期待について夫婦間で率直に話し合える関係が重要と考える。

- 3) 育児ストレスと性役割に関する態度との関係  
父親の性役割に関する態度との関連では、「家事や育児を分担しない男性は、人生の大切なものを失うことになる」の項目で、「そのとおりである」群は、「どちらかというところである」群よりストレスが低いことが示され、育児にかかわる重要性を認識し、積極的にかかわる父親は、ストレスを感じることなく父親役割を担っていると考えられる。また、「結婚に関わりなく、女性も仕事を持って経済的に自立すべきである」の項目では、「違う」と回答した父親は育児ストレスが低いことが示された。これは、伝統的な役割観のもと、夫婦で割り切った役割分担をし、父親は育児にほとんど関わらない状態を意味するものかもしれない。

また、「女性が仕事をするためには、たとえ夫が転勤しても仕事を辞めないくらいの覚悟が必要である」、「日本の男性はあまりにも仕事や社会に拘束され過ぎている」に対して肯定する父親では、育児ストレスが高いことが示された。仕事や社会に拘束され、育児にゆとりを持って関われない父親像が見てとれる。日本の企業社会においては、男性が育児や家事に参加できる体制が十分でないことが示唆された。また、大日向<sup>24)</sup>が述べているように、育児参加できる男性の職種が限られているにもかかわらず、マスメディアの情報の中に理想的な夫の姿をみて、自分の夫に不満を募らせるケースがある。妻からの期待に応えることのできないストレスが、育児ストレスに影響することも見逃すことができない。

## V 結 論

乳児期における父親の親役割認知および性役割に関する態度と育児ストレスとの関連を明らかにするために、3～5ヶ月児の父親を対象に質問紙調査を実施し、以下のような結論を得た。

1. 母親役割認知は、「愛情」、「健康」、「子どもの気持ちの理解」が上位であり、役割認知と母親としての妻とが一致している父親は約8割であった。一致する父親の育児ストレスは低い傾向が示された。
2. 父親役割認知は、「愛情」、「経済力がある」、「家庭を守る」が上位であり、役割認知と父親としての自己とが一致する父親は半数に満たなかった。一致する父親は、家庭で役割を分担することに肯定的であり、育児ストレスが低かった。とくに、役割認知に「包容力」をあげた父親は、脱性役割分業因子が有意に高得点であり、性による役割分業を肯定しない意識が認められた。
3. 性役割に関する態度は、男性の家庭役割分担を肯定する意識が高まってきていることを示していたが、3歳児神話と呼ばれる伝統的な考え方を肯定するものが82%であり、家事・育児は女性の果たすべき役割と捉えている父親が66%と多くみられた。
4. 性役割に関する態度と育児ストレスとの関連は、男性の育児に関わる重要性を認識している父親と、夫婦間で割り切った役割分担をしている父親では、育児ストレスが低い傾向がみられた。
5. 第1子の父親は第2子以降の父親に比して育児ストレスが低く、また高学歴の父親は育児ストレスが低い傾向にあった。

以上から、父親役割適応への看護介入には、育児に関する知識・技術の獲得への援助を進めるとともに、妻への役割期待や自己の父親役割への認識について考える機会や場の設定、夫婦間の性役割・親役割についての認識の調整などが重要であることが示唆された。

### 本研究の限界と課題

本研究の対象者は、地方都市に居住する集団であり、人数的にも198名という少ない人数で、研究結果

の一般化には限界がある。また、父親の育児ストレスについては、得点の比較にとどまっており、多くの対象者について調査検討し、ストレス高低の基準を設定することが求められる。父親役割認知や態度については、児の成長とともに変化する可能性が考えられ、縦断的な調査が必要であり、父親および母親の育児に関する認識内容をさらに具体的に把握し、比較検討をすることが必要と考える。

本研究は、文部省科学研究費補助金によって行われた基盤研究(c)(2)課題番号10672248の一部である。

## 文 献

- 1) 国立社会保障・人口問題研究所編：第2回全国家庭動向調査 結果の概要、<http://www.ipss.go.jp/Japanese/NSFJ2/chapter43.html> 2000.
- 2) 武田 文他：産後の抑うつとソーシャルサポート、日本公衆衛生雑誌、45巻、6号、564-571、日本公衆衛生学会、1998.
- 3) 牧野カツコ他：乳幼児をもつ母親の育児不安－父親の生活および意識との関連－家庭教育研究所紀要、1982.
- 4) 尾形和男：父親についての研究(Ⅳ)－共働き家庭における母親の育児に対する父親の協力と子供の精神発達－、国際学院埼玉短期大学研究紀要、14号、23-32、1993.
- 5) 矢倉紀子：母親の育児感とその関連要因、家族看護学研究、第6巻、第1号、2000.
- 6) 柏木恵子他：「親となる」ことによる人格発達－生涯発達の視点から親を研究する試み、発達心理学研究、第5巻、第1号、72-83、1994.
- 7) 久坂ヤス子他：親となる意識の形成、愛知県立医療技術短期大学紀要、第12号、37-43、1999.
- 8) Abidin, R. R. :The Determinants of Parenting Behavior, *Journal of Clinical Child Psychology*, 21(4), 407-412, 1992.
- 9) 岩田裕子他：父親役割への適応における父親のストレスとその関連要因、日本看護科学会誌、18巻、3号、21-36、1998.
- 10) Robinson, B E., & Barret ,R. L. *The Developing Father: Emerging Roles in Contemporary Society.* Guilford Press. 1986.
- 11) 仁平義明、村井憲男、大槻静子 他：母性観の変化、平成5年度科学研究費補助金(一般B)研究成果報告書「障害児の母親のための母性確立及び母親支援教育プログラム開発に関する研究」、11-24、1994.
- 12) 若松素子他：妻の就業をめぐる夫と妻の社会的性役割観、東京女子大学紀要 論集42 1991.
- 13) 前掲9)
- 14) 前掲12)
- 15) 斎藤学：被虐待児としての神戸の少年Aと彼の連続殺人について、*アディクションと家族*、15(4)、414-426、1998.
- 16) 前掲12)
- 17) 河合準雄：母性社会日本の病理、中央公論社、1976.
- 18) 斎藤学：父性を再定義する、*アディクションと家族*、17(2)、1168-173、2000.
- 19) 前掲9)
- 20) Ferketich, S.L., Mercer, R. T.: Predictors of Role Competence for Experienced and Inexperienced Fathers, *Nursing Research*, 44(2), 89-95, 1995.
- 21) Greenberg M et al: Engrossment : The Newborn's impact upon the Father. *Amer. J. Orthopsychiat* 44(4) July ; 520-531, 1974. 訳 竹内 徹：エングロスメント(没入感情：のめり込み)－父親に与える新生児のインパクト、*Perinatal Care* , 13(11), 1994.
- 22) Mercer, R. T., Ferketich, S.L.: Experienced and Inexperienced Mothers' Maternal Competence During Infancy, *Research in Nursing & Health*, 18, 333-343, 1995.
- 23) 前掲20)
- 24) 大日向雅美：育児ストレス－日本とイギリスを比較して－、*こころの科学* 73、7-12、日本評論社、1997.